相関構文の論理と心理

――『クレーヴの奥方』における分析法への考察（2）――

萩原茂久

I 相関語句による構文の簡明さと強い印象

私は以前の論説『詠嘆と分析』[1]の序説的な部分において、『クレーヴの奥方』に用いられた簡素な用語と文体の特徴について触れた。この作品をくり返し通読してえられた印象として、否定語句、比較語句、相関語句の圧倒的な数の多さがあげられるが、それはジャン・ドゥ・バザンの統計的研究[2]によって数字のうえで実証されたということを述べた。そしてこの統計的研究を利用しながら推計して行くと、「否定」語句が千個ないし千七十個、「相関」が三百個（マイナスα（アルファ））、「比較」が二百六十個程度という線が出てくるのであって、これらの頻度数は第一位の Etre 九百個、第十九位の Parler 百六十二個の順位のなかで比較するとき、『クレーヴの奥方』のなかには「否定」「相関」「比較」がたんねんに、ときには飽きもせずにくり返し現われることが了解された。

語の頻度数における上位十九位のうち、五つのものを除いた十四個は Etre, Avoir, Faire などの色の淡い動詞であり、残りは「否定」の Ne…pas（第五位）、Ne（第六位）（虚辞を含む）、Ne…point（第十八位）、「相関」などの Si（第十位）、「比較」の Plus（第十五位）となっている。まず上位を第十九位までで区切ったのは、この範囲内では全語数六一七七のうち動詞が四八一五であるのに対し、（一部に接続詞を含む）副詞が一三六二であ

って、動詞対副詞が（推定）ほぼ四対一となるような特徴ある図式となるからである。しかし第二十位から二十九位までを取れば、名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞がそれぞれ入りみだれてはいってくるようになる。

さて、動詞だけで文の色づけをすることができないのは明らかだろう。しかし副詞は文の調子の強弱や感情性を打ち出すことが可能な因子となりやすい。

「アンリ二世の治世の末年ほど壮麗さと優美さとが輝かしく見られたことは、それまでフランスには一度としてなかった。……」と述べられる作品の冒頭には、強い否定 Ne……jamais と、比較語句 Tant(de)……que からまって文が構成されており、賛辞的言語の性質をもかなり意味ぶかく示しているが、最上比較級と同等の価値をもっている。つまりこの作品においては、「否定」語句のかなりのものが「比較」語句と組み合わされて書かれている。また比較の Moins が否定の Ne……pas と組み合わされることによって、二重否定的な意味が打ち出され、一種の「婉曲法（ペリフラーズ）」となっているものも多いが、これもまた積極的ではないにしろ、消極的な賛辞的言語といえるのではなかろうか？　このようにして、『クレーヴの奥方』では「否定」と「比較」との組み合わせが多く用いられるが、「比較」が比較級・最上級の形で単独に用いられる例が多いのは、すでに以前から研究者たちに気づかれていた。また絶対語と称すべき名詞・形容詞も比較を示す語句と等価のものとして用いられている。

「否定」については二重否定がかなり多いという印象であり、積極的な肯定が不可能と思われる事物や行動について用いられていると同時に、とくに会話の文のなかでは条件文の多少の使用と並んで、否定のひんぱんな使用が会話をいちじるしくまわりくどいものにしている。

Si……que を中心とする「相関」語句が成立させている構文は、婉曲みがうすく、簡明な印象を与える。『クレーヴの奥方』においてこの語句による構文が多く用いられているというだけでなく、その簡明で直接的な構造によって読者に強い印象を与え、ときにはなぜこの種の構文が多いのであろうかという疑問となって感じられる原因となる。この疑問が私にそれについての考察をうながしたのであったが、同じ作者の作品であっても、『タンド伯爵夫人』になると、接続詞をも含めた Si の頻度は第四十四位となり、『クレーヴの奥方』における第十位、

『モンパンシエ公爵夫人』における第八位に遠く及ばなくなる。[3]『モンパンシエ』は『クレーヴ』の原型といわれる作品であって、語の頻度順位が非常に似ているのは当然のことと思われるが、『クレーヴの奥方』における「否定」や「比較」語句から成る構文について、いままで研究者たちが部分的に触れてきた事実はあっても、「相関」語句のそれについては触れられていないと信ずるので、ここにその考察をおこなうことは多少とも意義のあるものと私は考える。

II 考察の対象となった相関語句の範囲と意味

ブリュノ[4]やアーズ[5]の研究においても、Si……que, Tellement…que に重要な意義を見いだして考察しているとは思われない。形の似ている Si que, Tellement que の接続詞句については、前者は古代フランス語ではしきりに用いられたが、十七世紀になるとあまり使用されなくなったとか、[6]後者については、十七世紀においては平俗ではなかったが、現代では俗語にしか用いられなくなったとか[7]と述べられている。十七世紀の三大辞典といわれる「リシュレ」、「フュルティエール」、「アカデミィ」がこのような場合大きな参考になるのだが、Si について「副詞」と明記している辞典は一つもない。

一六八〇年発行のピエール・リシュレ『フランス語辞典』では、総題目的に「一種の条件的接続詞……」と書かれ、第一項目には条件節をひきいる語としての例がのっており、第四項目に至って、「この小辞が tellement の意味にとられるときは、そのあとに que を要求する」とある。[8]

つぎに一六九〇年の、アントワーヌ・フュルティエール『総合辞典』には、この語の個所のトップに「前置詞、または条件的および疑問的な接続詞」という説明が置かれ、第五項目に至り、「比較し、誇張し、[9]あるいは肯定するために、副詞的に用いられる」と述べられたあとで、Si…que による相関的な例文ものせられている。[10]

最後にアカデミィ・フランセーズ編さんによる辞典（一六九四年発行）では、まず「接続詞および条件的小辞……」と書かれ、第十二項目のところに、「Si はまた Tellement を、非常な程度に、を意味し、またそのさい一個の que がそれに従う」の説明につづけて、三つの例文が示されている。[11]

表1　考察の対象となった相関構文の種類と数

『クレーヴの奥方』	第一部	第二部	第三部	第四部	計
Si～que (si が複数個の文を含む)	20	11	4	13	48
tellement～que (tellement が複数個の文を含む)	5	1		2	8
tel (telle)～que	1		1		2
tant(de)～que (tant が複数個の文を含む)	3	1		3	7
{Si {tant(de)～que	2	1	1	1	5
{Si {tellement～que	1				1
{tant(de) {tellement～que	1				1
trop～pour		1	1		2
計	33	15	7	19	74

「小辞」(Particule) という用語はあいまいである。一音節か二音節の変化しない小さな語を指す文法用語であることは誤りのないものの、「接続詞、前置詞、同性質の他のもの」(リシュレ) であったり、「前置詞、間投詞、数個の代名詞や副詞」(フュルティエール) であったり、また「接続詞、間投詞などであり、Si, quand, que」(アカデミィ) であったりして定めにくい点がある。しかしいっぽう Tellement については、三大辞典ともに「副詞」と規定しており、それが「強い程度」、「誇張」の意味をもっていたことは疑いを入れない説明となっている。

語源的には、接続詞の Si はラテン語の si, 副詞の方の Si はラテン語の sic から出ていることが知られているが、十七世紀ごろには語源的・意味的な混同が起こっていたのではあるまいか？　はっきりいえることは、Si が Tellement にくらべて幅の広い語だということである。それが条件を示す接続詞から出発して、Tellement と同じように副詞的にも用いられるようになったが、十七世紀においてはまだはっきり副詞と規定できかねたのであろう。

がすでに『クレーヴの奥方』においては、Si…que は

Tellement…que にくらべて数がずっと多くなっており、それは Si…que が Si の二百四十一個マイナスα（アルファ）であるのに対し、Tellement…que は Tellement の十五個マイナスα（アルファ）にすぎない。（マイナスするものは前者では条件節や間接疑問節に使用される接続詞、強度の副詞でも結果節をもたないもの、また肯定や譲歩の副詞などであり、後者はやはり結果節を欠いたものである）

『クレーヴの奥方』であげるべき相関語句による構文は、以上の二つのほかに、名詞にかかって同様の働きをする Tant (de)…que であり、Tel（または Telle）…que である。さらに Si…que＋〔不可能〕と全く同じ意味となる Trop…pour も無視することはできない。このような範囲で関係ある文を拾いあげてみた結果、表1のようになった。七十四個の文のほかに拾いおとしたものがないとはいえまいが、主要なものはほとんどすべて拾いあげたつもりである。Si…que の文には Si…si…que や Si…si…si…que も含まれ、Tant (de)…queについても同様であり、また前の項（que より前の部分）に Si と Tant (de) と Tellement がそれぞれ二種類ずつ組みになっている文もあるのであって、この表にあらわれた「強度」あるいは「誇張」の副詞、Si, Tant (de), Tellement, Tel (Telle), Trop の総計は約百個となっている。

Ⅲ 分類される五つの型と両項の関係

さて、「比較」を意味する語がより人物の肖像について使用されるとすれば、「相関」語句はむしろ感情表現に関してより多く用いられるということを、私はすでに述べたことがあるが、[12] この種の構文がこんにちの目から見るとかなり素朴なものであることは否定できない。

「ギュイズ騎士はシャルトル嬢に対して抱く感情や意思をあまりに言動に表わしすぎたために、だれひとり彼の心のうちを知らない者はないほどになった」

「彼女（クレーヴ夫人）はいましがたの出来事にひどく気をとられていたので、その放心ぶりをかくしおおせなかった」

「……が、彼（ヌムール公）はあまりに感嘆すべき美しさの夫人を見たので、この姿の印象がひきおこす激情をよく制することができなかった」（傍点筆者）

これらの引用から見てもわかるとおり、意味は単純であり、原因――結果の素朴な論理によってつらぬかれて

いるが、分析小説の明晰性に大きく寄与している。しかしことがらは必ずしも単純ではない。

これらの構文は、文章の前の項(que 以前)から見れば後の項(que 以後)はその結果であるが、後の項から見れば前の項は「程度」(あるいは〔強度〕)であるという、二重の意味を含んでいる。また前の項から見れば後の項は未来であり、後の項からすれば前の項は過去であって、両項は時間性をもった「対置」であるということになる。

ところでこれらの構文に、なんらかの意味的な類似性なし、統一性があるのだろうか？　作品から拾いだした七十四個の文をこまかく検討してみると、それらがおおよそ五つの型に分かれることが了解される。それを一つ一つ見て行くわけであるが、同じ語句の訳を例文においてすべて同じにしなかったことをおことわりしておく。相関語句の訳はすべて初歩的に「あまりに……なので～だ」とすれば、原文の状態や語句の位置関係が推定できやすくなるが、日本語がぎこちなくなりすぎると思われるときは、「あまりに」の代わりに「きわめて」「このうえなく」「非常に」「ひどく」などの訳語を当て、いずれの場合にも傍点をほどこした。

1　第一型(対象・受動型)

初めの部分の宮廷の叙述のところでギュイズ公爵について、

「この公爵はあまりにも目ざましい力倆を発揮していたし、きわめて輝かしい戦果をもあげていたので、彼を羨望の目で見ないような部将はひとりもいなかった……」(第一部　P二四三)[13]と作者は書き、またアンリ二世の愛人ヴァランティノワ夫人について、「彼女は……王の心をあまりにも絶対的な力をふるって支配していたので、彼女こそ王自身と国家との主人であるといってもよいほどだった」(同　P二四六)

さらに作者は女主人公シャルトル嬢(のちのクレーヴ公爵夫人)が宮廷に登場してきたときのことを、つぎのように述べる。「彼女は王妃や女王がたから考えられる限りの好意をもって迎えられ、一座のひとびとからあまりにも驚嘆の目で見られた結果、彼女の周囲で聞こえるものは、ただただほめことばばかりという状態だった」(同　P二五〇)

フュルティエールも Tellement…que について(した

がって同義の Si…que について）説明したように、これらの文章に「誇張」[14]があることはいうまでもないが、以上三つの代表例から帰納できる図式として、〔価値・すぐれた資質〕（前の項）→〔公衆の承認・賞賛〕（後の項）のように単純化することができよう。「事実」「行動」「状態」に表現される「価値」ないし「力の表われ」が対象となってひとびとの心に受動的に印象され、情念を引きおこし、「承認」や「賞賛」という結果の状態を引きおこすのだといえる。

以上は価値ある対象が広く公衆に感銘を与える図式であるが、つぎには同種のものが特定の個人に反応を引きおこす例を示すことができる。

小説の初期にクレーヴ夫人がヌムール公にひかれたころのことを述べて、作者は

「彼はあらゆる男たちからいつもあまりにずばぬけていたし、どんな場所でもその見ばえのよい姿と才知の輝きによっておどろくばかりに巧みに会話をあやつったので、たちまちのうちにヌムールは彼女の心に大きな印象を与えるようになった」（第一部　P二六三）と書き、また

「クレーヴ夫人はあまりにも魅力ある容姿と挙措動作のヌムール公をそこに見たので、ますます賛嘆の念にとらえられるのだった」（同　P二六三）と述べるとき、文の前の項に表現される人物の「美質・価値」が、後の項において特定の個人に「印象」や「初期的情念」を与える図式が明瞭に浮かびあがってくる。この印象や初期的情念というのはデカルトのいう「おどろき」であり、いいかえれば「賛嘆」である。

しかしこの図式においては、必ずしも文字どおりの初期的情念だけを含むのではない。もっとあとになった場合の更新的な情念、たとえば「恋愛感情を新たにする」という例もそこに含まれるであろう。

「彼女（クレーヴ夫人）はその日あまりにも美しかったので、彼（ヌムール）がもしまだ彼女に恋いこがれていなかったなら、その瞬間まさにそうなったことだろう」（第二部　P三〇一）

この場合、後の項は条件文で構成されていることが問題となるかもしれないが、新たな情念を吹きこまれたヌムールの心理がそこに暗示されていることは否定できまい。

初期的、あるいは更新的な情念だけでなく、「憐れみ」とか「安心感」のような他の情念が価値ある対象（価値ある言動を含む）によって、「対象→受動的情念」の一直線上に（なんらかの外力によって曲げられたり、そらされたりすることなく）生ずる例もここに入れることができよう。

「そして彼（ギュイズ騎士）は大そう頭脳もすぐれ容姿も美しかったので、彼を不幸にしてしまったのを見て憐れみを感ぜずにはいられなかった」（シャルトル嬢＝クレーヴ夫人は事情でギュイズ騎士とは結婚できなかった）（第一部　P二五九）

「『……おまえの告白（ほかの男に恋愛感情をもっている、との）はあまりに高貴だものだから、わたしは安心させられてしまう……』」（クレーヴ公の妻へのことば）（第三部　P三三四）

以上は、価値ある対象の影響が情念の内部にとどまる種類のものであるが、結果として行為・行動にまで及ぶものを含めることができるであろう。

「……それに彼（シャトラール）は粋で、情熱的なたちであり、それらの点でこのうえなくダンヴィル公に気に入られたので、公が王太子妃に抱く恋ごころの打ち明け相手にされるまでになった」（第一部　P二五五）

「この王女は兄の国王に対して及ぼしている影響力のゆえに大きな尊敬を受けており、その力はきわめて大きかったので、王は平和条約を締結するさいに、彼女をサヴォワ公と結婚させられるならピエモンの返還を承知してもよいといったほどだった」（同　P二四九）

これらを包含すれば、価値ある対象に関係するのが公衆ではなくて特定の個人である場合には、〔価値・資質〕（前の項）→〔関係する個人の印象・情念・あるいはその結果引きおこされる行動〕（後の項）という図式が形づくられることになる。

2　第二型（情念抑制不可能型）

第一型から、もっとも数的に優勢な第二型に移る、そのちょうど中間に位置するともいうべきものは、つぎのような相関語句による文であろう。

これはクロミエの別荘に退いたクレーヴ夫人が夜ヌムールを思って夢想にふけっている状況を、しのんできたヌムールが盗み見している有名な場面である。

「……が、あまりにも彼女が美しかったので、この姿の印象がひきおこす激情をよく制することができなかった」（第四部　P三六六）

これは〔美質〕→〔印象・情念〕という図式の第一型に入れても不自然ではないものといえる。しかし、後の項に情念の抑制が不可能だという表現が含まれていることに注目したい。もちろんそれは、情念のはげしさの程度を示す云いまわしにすぎないと断定することも許されようが、そこには作者の一つの意識が――広くいえば時代精神の落とす影が見られるのだ。作者が心の底からそれを肯定しているかどうかは別として、情念は抑制し、支配されるべきもの、との意識に大なり小なりしばられているというべきであろう。

この中間型をプレリュードとして、そしておおよそ、その後の項を新たに前の項に進ませ、かくれていた第三項を後の項に据えた図式が、Si…que その他の相関語句で構成される文のなかでもっとも多い例となるものである。

いくつかの代表例をあげてみよう。

〈イタリア人宝石商の店で〉

「彼（クレーヴ公）はあまりに彼女の美しさにおどろいたために、その驚嘆の情をかくすことができなかった」（第一部　P二四八―二四九）

〈舞踏会の出会いで〉

「ヌムール公は彼女の美しさにあまりにおどろいたので、……感嘆が顔色に出るのを防ぐことができなかった」（同　P二六二）

〈ヌムールの第三者的・一般的な形での愛の告白のあとで〉

「彼女（クレーヴ夫人）はたったいまの出来事にひどく心を奪われていたので、何もなかったようによそおうことはできなかった」（第二部　P二九四）

〈妻の愛している男はだれなのか、クレーヴが策略的にヌムールの名を妻の耳にささやいてみた場面で〉

「ヌムール公の名と、長い旅のあいだ毎日夫の眼のまえで彼と同席しなければならないという考えが、クレーヴ夫人にあまりにも強い衝撃を与えたので、彼女はそれをかくしおおせなかった」（第三部　P三四一）

〈夜しのんでクレーヴ夫人の姿を見に行った二日後、口実を作ってクロミエを訪問したとき、夫人はヌムールに帰ってもらおうとする〉

「クレーヴ夫人のやはり変らないきびしい態度を見て、この貴公子の感じた苦悩は極度に劇烈なものだったので、彼はたちまちのうちに顔色が蒼白になった。」(第四部　P三七二)

〈クロミエの別荘の夜、窓を越えてはいってこようとするヌムールの姿に気づいたとき〉「彼女(クレーヴ夫人)はあまりにも動揺してそこ(侍女のいる部屋)に逃げこんだので、その動揺をかくそうとして気分がわるいといわねばならなかった」(第四部　P三六八)

〈クレーヴ公ははじめてシャルトル嬢を見た数日後、王妹の部屋で〉

「彼はシャルトル嬢の才知と美貌のことで頭があまりにもいっぱいになっていたので、ほかのことは何も話題にできなかった」(第一部　P二五〇)

〈クレーヴ夫人が夫にした例の「告白」を盗みぎきしたあと〉

「この貴公子(ヌムール公)は恋しい情で極度に心がいっぱいになり、この耳で直接きいてしまった内容にひどくおどろいたので、ずいぶん世間にありがちな軽率な行為に走ってしまった(ひとから聞いた話しとして、自分のかかわるアヴァンチュールを他人に話すということ)」(第三部　P三三八)

〈王太子妃がある女性のヌムール公宛ての手紙を拾ったといって、クレーヴ夫人に内容を読むようにいったあとで〉

「王太子妃は……はなれて行ったが、極度に大きな衝撃と動揺とを残して行ったので、しばらくのあいだクレーヴ夫人はその場を動くことができなかった」(第二部　P三〇八)

〈夜、クロミエで自分の描かれているメス攻囲戦の絵をクレーヴ夫人が眺めている姿を盗み見ている場面で〉

「この貴公子(ヌムール公)もまた、あまりに心が乱れてしまったために、クレーヴ夫人を眺めつづけて身動きもしないでいた」(第四部　P三六七)

〈クレーヴ夫人に恋したのちに〉

「クレーヴ夫人に対するヌムール公の情熱は最初あま

りにはげしかったので、彼がこれまで愛し、不在ちゅうも手紙を欠かさなかった女性たちすべてに対する、好みも、また思い出さえも忘れ去ってしまった」（第一部 P二六九）

以上の第二型から結論できる図式は、〔強い、はげしい情念〕（前の項）→〔身体表出・言動（または行動不能、結果の心理状態など）〕（後の項）であることはたやすく理解できる。そしてこれらの後の項において、「かくことができなかった」「防ぐことができなかった」「よそおうことができなかった」あるいは、「かくそうとして口実を作った」――などの語句にひそむ作者の意識をえぐり出す必要がある。強い度合いを示す単なる云いまわしである以上に、一つはさきほどの第一――第二中間型に含まれるのと同じもの――つまり「情念を抑制し、支配すべきだ」との意識であるが、さらにもう一つは、情念――とりわけ恋愛情念を「秘密」と同義にみなして、「みずからの秘密をあばいてはならない」との意識がひそむといえるのではあるまいか。「情念＝秘密」がその結果の「身体表出」や「言動」を通じてひとびとの知るところとなるのを、作者はひどく嫌悪していると思われるふしがある。

宿命の王弟妃の、毒殺かと疑われる急死の前後を描いた生彩ある「報告」(Relation) をつけることによって貴重な文献である度合いを増した、ラ・ファイエット夫人の記録『アンリエット・ダングルテール』には、ルイ十四世との恋愛関係を洩らすことによって不利な状況を招き、王の寵愛を失なってしまうラ・ヴァリエール嬢の插話がある。叙述はできる限り感情を排して客観的であろうとするが、ここには明らかに作者の非難と侮蔑とが感じられる。そしてまたここには、「秘密の打ち明け相手」の問題もからまって存在しており、それについて私もいくらかの考察をしたことがあるが[15]、自分の秘密を積極的に（もちろん秘密を守ってくれる者と信じきっている相手に）話さなくても、敵側の人間やライヴァル的存在の眼がその辺にあるなかで恋愛情念が表情・身ぶり・言動を通じて洩れ出てしまうときには、直接的なことばによって話されるのと同じくらい雄弁に語られる結果、秘密は他人にさとられてしまう。

こうして、上述した第二型の後の項〔身体表出・言動〕が今度は前の項に押し出され、いままで後の項のそ

のまた後の項としてひそんでいたといえる〔作者の意識〕が、新しい後の項に姿を現わしてくる。すなわち第二型の変形といったらよいものであって、〔(情念の結果あるいは反応としての)身体表出・言動〕(前の項)→〔結果としてのみずからの秘密の暴露(他人に気づかれる・知られる、あるいは他人の態度・言動に表われてくる二次反応など)〕(後の項)である。

〈ギュイズ騎士の恋愛感情について〉

「ギュイズ騎士はシャルトル嬢に抱いている気持ちや望みをあまりにも言動に表わしてしまったので、だれひとりそれを知らない者はないようになった」(第一部P二五三)

〈クレーヴの恋愛感情についての、父ヌヴェール公の態度〉

「……彼(ヌヴェール公)はその怒りをかくそうとの配慮がひどく欠けていたので、この話題はまもなく宮廷じゅうにひろがり、シャルトル夫人の耳にまで達した」(同　P二五四)

〈クレーヴ公とシャルトル嬢の結婚式で〉

「ギュイズ騎士はことさら目に立つ行動をしてこの儀式に出ないでいるわけにもいかなかった、が、心にあふれる悲しみをどのようにしても抑えることができなかったため、心のうちは容易に見てとられる始末だった」(同　P二六〇)

〈ヌムール公の落馬事件のとき〉

「……そのとき彼女(クレーヴ夫人)の表情はひどく変わったので、ギュイズ騎士ほど関心を寄せていない者でも、それに気づかないではいられなかった」(第二部三〇六)

〈トゥールノン夫人が急死して、生前彼女から愛され、結婚まで約束してくれたと思いこんでいるサンセールに対して、自分こそそうだと主張し、その証拠として彼女の手紙や肖像画を見せたエストゥットヴィルについて(話者はサンセール、そのまた話者は友人クレーヴ)〉

「『……エストゥットヴィルはあまりにも涙にかきくれた顔をしていたので、他人に見られてしまわないようにその場から出なければならなかったよ……』」(同P二八七)

〈自分宛てのテミーヌ夫人の手紙を紛失したシャルトル管区防衛官について〉

「……が、彼はあまりに不安を表わしたので、他の者たちはそれに触れるのをやめた」（同　P三一二）

ここで一つだけおもしろい例といえるのは、この図式において結果から逆に原因を規定したものがある。それは婚約期間ちゅう、ほんとうの恋愛感情を疑うクレーヴ公に、シャルトル嬢が弁明する個所に含まれている。

『……それにあたくしは、あなた様にお会いしますときあまりにたびたび、羞恥で顔が赤くなりますので、あなた様にお会いすれば心が乱れてしまうのは疑えませんわ』（第一部　P二五八）

さらに〔情念の身体表出〕→〔相手に与える効果〕と〔情念の身体表出〕→〔予想できる結果〕の図式も、第二型の変形に加えることができよう。例は一つだけあげておく。

〈軽率な行為（上述）によってクレーヴ夫人の信を失なった結果、それを悲しむヌムールについて〉

「……が彼が極度の悲しみと、あまりにもうやうやしい態度で彼女に近づくことを恐れているようすを見せたので、……彼女は相手にそれほど罪があるとは感じられなくなってきた」（第三部　P三五四）

3　第三型（情念抑制可能型）

社会的に未熟・未経験であったり、人格的に完全でないため「情念＝秘密」がやすやすと外に表われる場合もあるが、強い情念は抑制しにくいものだという宿命的な色合いは否定できず、秘密がたもてないことに対する作者の批判的な意識や感情とのあいだにかっとうが生ずることもあり、それが一つの内面のドラマともなる。

しかし意志的に情念を抑制して、心のなかをひとびとにさとられないようにする図式が、相関構文において述べられるのは作者の意識からして必然的なものといえるだろう。このようなものを第三の型と名づけることにしたい。

作品の最初の部分に、アンリ二世と王妃とヴァランティノワ夫人との三角関係が述べられるが、王妃についての叙述のなかにつぎのような相関の文章がある。

「……が彼女はあまりにも深く自分の気持ちをかくしていたので、その気持ちを判断するのはむずかしかった……」（第一部　P二四二）

また、ヌムールはクレーヴ夫人の貴重な価値をみとめ、

その燃える心をかくそうと思った結果の行為をおこなう個所では、〔意志的な心理・行動〕→〔情念の無表出、だれにもさとられない〕の図式になる。(ギュイズ騎士だけは感づいてしまうが、これはライヴァルの性質上当然であろう)

「彼はこのうえなく賢明なふるまいをしたし、またきわめて言動には注意したので、ギュイズ騎士を除いて、だれひとり彼がクレーヴ夫人を思っていることに気づいた者はいなかった」(同　P二七〇)

シャルトル夫人が娘を教育したことについても、それは一つの意志的な行動であり、〔意志的な行動(完ぺきな教育)〕→〔よい結果・よい世評〕という図式によって、第三型に入れることができる。

「……それにシャルトル夫人が、もともと控え目な娘に、あまりにも礼儀作法にぴたりとはまった振る舞いを教えこんだので、シャルトル嬢はついに手のとどかぬくらい高いところにいる女性と尊敬されるまでになっていた」(同　二六〇)

しかし意志的なものというのは、必ずしもつねに純粋な分子ばかりを含まない。「意志」対「情念」の単純な図式において、はたして人間は純粋なかっとうを演ずるのであろうかという疑いはある。デカルト的な意味での意志は、人間心理において強力な役割りを果たすのであろうか。欲望とか未来的な欲求とか自己愛が、情念のなかから頭をもたげて、擬似意志的な役割りを演ずることによって他の情念を抑制したり、支配したりするのではないか。私は『クレーヴの奥方』の中心的なテーマは情念のなかの能動的意志ともいうべき「自己愛」が「他者愛」やそれにまつわるすべての情念に打ちかつ過程にほかならないと信ずるし、その正当化に作品執筆の内的動機があると考える。このような論理からすれば、「意志的」という概念は「策略的」「術策的」という概念にまでひろがるのであって、前の項は〔意志的(な行動)〕から〔策略・術策・巧妙さ〕におのずから横すべりして行き、この前の項に対する後の項は〔成功的な結果・よい結果・結果としての効果〕などとなって行く。

〔策略的行動〕→〔成功的な結果〕の例

「……がヴァランティノワ夫人はこの結婚がもくろまれているとの通報を受けて、あまりにも巧妙にその結婚

のじゃまをし、きわめて早手まわしに王に注進しておいたので、ダンヴィル公が王に打ち明けたときには、承知できないという態度をされ、……」（第一部　P二五五）

「……が彼女（トゥールノン夫人）は最大限に配慮して彼（サンセール）を安心させ、その疑い（ほかの男を愛しているのではないか、という）にあまりにも侮辱されたとの怒りを見せたので、彼の頭から疑惑は完全に一掃されてしまった」（第二部　P二八四）

〔術策・巧妙さ〕→〔結果としての効果〕の例

「……しかしながら、（ヌムール公は）できる限りの機知を働かせて、きわめてじょうずにご機嫌をとり、非常なほめことばを聞かせたので、彼女（クレーヴ夫人）のはじめのうちのひややかさはいつのまにか消え去った」（第四部　P三七一）

〔行動の巧妙さ〕→〔よい結果〕の例

「……彼女（シャルトル夫人）はこのうえない巧妙さとやり口で振る舞ったので、モンパンシェ公はこの結婚を願っているようすに見受けられるようになり、……」（第一部　P二五四）

4　第四型と第五型

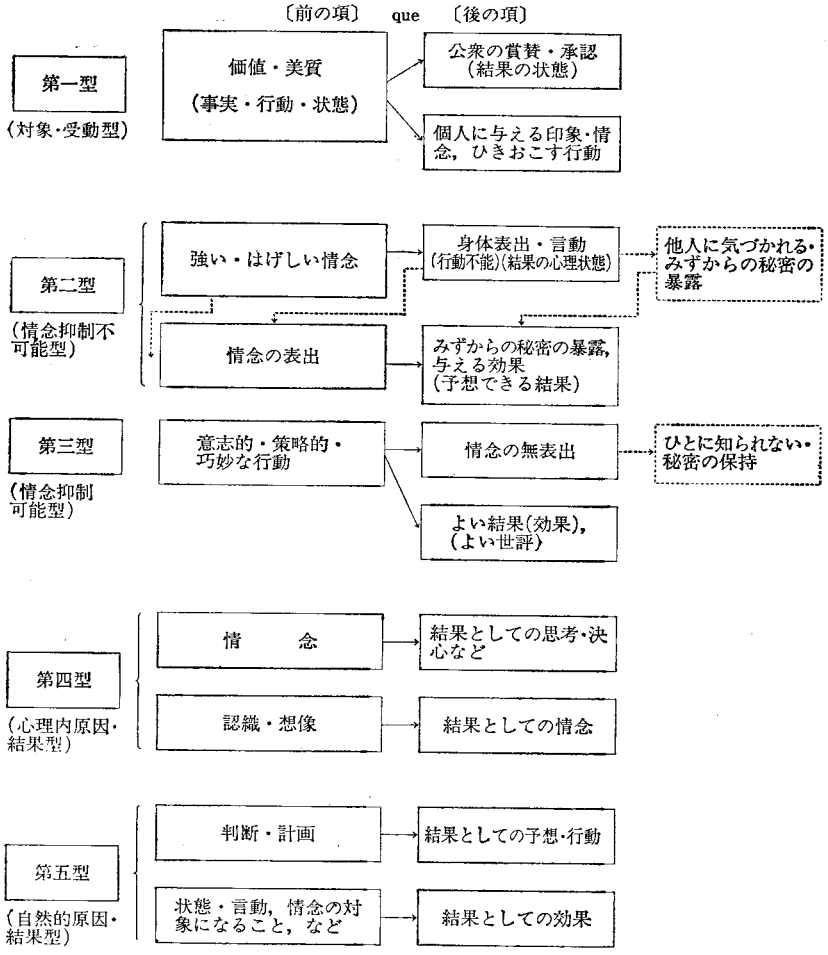
その他のものはほぼ二つの型に分けられ、「心理内原因・結果型」ともいうべき第四型においては、原因としての情念か、もしくは結果としての情念が見いだされる。すなわち図式化すれば、〔情念〕→〔結果としての思考・決心など〕が一つであり、もう一つは〔認識・想像〕→〔結果としての情念〕である。

前者の例

「夫が出発し、クレーヴ夫人はひとりになって、きょう起こった出来事をじっと考えてみると、あまりに恐ろしくて、それはほんとうにあったこととは、とても考えられなかった」（第三部　P三三六）（〔恐れ〕→〔結果の思考〕）

「彼（ヌムール）は自分に愛を告白するのではないかとの恐れ、好意的にすぎる返事をしはすまいかとの心配、彼の訪問が夫に感じさせるかもしれない不安、あとで夫に報告するにしろ、一切をかくすにしろ、それに感ずる苦痛が一時に彼女（クレーヴ夫人）の心に湧きあがり、

表2　相関構文の型分類と意味



あまりにもはなはだしい当惑をおぼえたので、彼女はおそらく最高に願っていることを避ける決心をした」（第四部　P三六〇）（〔当惑〕→〔決心〕）

後者の例

「彼（ヌムール）が妻の部屋にきている、ひとりできている、そして恋を打ち明けているかもしれないという考えが、この瞬間あまりにも新しく、堪えがたいものに思われてきた結果、嫉妬のほのおが彼（クレーヴ）の心で今までにないはげしさで燃えはじめた」（第四部　P三六一）（〔想像〕→〔結果としてのはげしい嫉妬〕）

「到着したとき彼（クレーヴ）はまだ状態がわるかったが、彼の表情には自分（クレーヴ夫人）に対するきわめてつめたい、極度に凍りついたものが感じられたので、彼女は心からおどろき、悲しみを感じた」（同　P三七三）（〔認識〕→〔結果としてのおどろき、悲しみ〕）

最後の第五型はわりあい自然的な原因・結果型といえるもので、いろいろなケースが存在するが、ほぼ二つの系統に大別できると私は考える。〔判断・計画〕（前の項）→〔結果としての予想・行動〕（後の項）であり、また〔状態・言動・情念の対象となることなど〕→〔結果としての効果〕である。二つの系統からそれぞれ一つずつ例をあげておこう。

「彼（ギュイズ騎士）は、シャルトル嬢と結婚しようと望んでもそこにはあまりに多くの越えがたい障害物があるので、成功できるだろうとの期待をもつことはできなかった」（第一部P二五九）（〔判断〕→〔結果の予想〕）

「彼女（クレーヴ夫人）は極度に安心感を与える態度で話したし、また真実というものは……きわめて容易に納得させる力をもっているものだから、クレーヴ公は完全に妻の無実を信じてもよいという気持ちになりかかった」（第四部　P三七六）（〔言動〕→〔結果としての効果〕）

Ⅳ　相関構文の論理と心理

「避けるべき安易な語のくり返し」[16]という評句は、以上のかず多くの例にも見られるような、作者がくり返し用いた相関語句による文に対して向けられたものだったろうか？　私は一度はそれを肯定する。十七世紀だから

そのような素朴な語句によって文章が構えられたのだとは、必ずしも断定できないのは、たとえば『タンド伯爵夫人』に相関構文がほとんど存在しないのを見てもわかる。だが、この作品は読者に感情を与えるという点ではよく機能しているとはいえない。文体の完成度と交換に情感の面がぎせいにされてしまった。感情・情念のポジティヴな、あるいはネガティヴな強度を表現することにかかわる相関構文は、その型どおりの誇張によって非現実的な調子をもちながらも、その実あまりにも人間的な心のドラマの小宇宙を封じこめている。そして内心にそれほどの強い情念を与えるほど、世界は新鮮である。すなわち、最高の価値であるような美が、対象としてそこにあるからであるし、また作者はそのような対象をそこに置かなければならない。

しかし情念は、とりわけ情念の過剰は人間の幸福と生命とを破壊する恐れがあるので抑制しなければならない。このデカルト的情念論の原理は、陰謀と奸計の宮廷社会という具体的な場に移しかえられて、人間の悲劇的な姿を浮き彫りにする。情念＝秘密が意に反して洩れ出てしまうことによって、みずからの秘密はあばかれるが、これらにかかわる相関構文には、内面があばかれはしまいかとの不安・恐れや、あばかれてしまったことへの批判・侮蔑などが、作者の意識として注がれている。すなわち対象がそのままストレートに受動される第一型とはちがって、第二型は複雑なものを蔵しているのであって、作者の相関構文は必ずしも単純素朴なものではないことの証拠となるであろう。また第二型においては、作者の意識もまた重層的なものとなり、身を危険にさらしても外に表出してしまわざるをえない人間情念の、さらには人間存在の悲しさに対する同情と憐れみの眼が感じられないであろうか？　意志的・術策的なありかた、つまり第三型について、必ずしも作者の肯定的な内心のひびきが感じられない場合があるのが、その一つの証明ともなるのである。情念が表現されないことによって秘密が保持されたり、よい結果や効果がもたらされるのは肯定すべきことではありながら、その裏にかくれている作者のやゆや嘲笑を感じとったのは私だけであろうか？（王妃カトリーヌ・ドゥ・メディシス、ヴァランティノワ夫人、シャルトル夫人について述べるときとりわけそうである）

相関構文の前の項は、後の項の意味や価値を生じさせる起動力である。文章そのものにも一種の力があって、これが読者を一つ一つの文にとどまらせると同時に、それらの文は物語り全体を押し進める力をもっている。一群の文による意味ある心理分析の先頭にこの相関構文があるときは、それ自体が一つの心理分析の小宇宙でありながら、全体の分析を進ませる起動力ともなるのである。

そしてもう一つ結論的にいえることは、『クレーヴの奥方』がすでにデカルト的なものから脱しているにもかかわらず、もっとも多くその相関構文のうえにデカルト的なものを残しているという現象であろう。

（1） 一橋論叢　昭和五十年九月号

（2） Jean de Bazin: Index du vocabulaire de la Princesse de Clèves, Librairie Nizet, 1967

また Jean de Bazin: Qui a écrit la Princesse de Clèves?, Librairie Nizet, sans date にも右記の研究の主要部分が一部に再録されている。（日づけがないのにあえて「再録」といったのは、この研究書の最後のページに〈語いと文学〉と題して八つの研究が紹介されてあり、右記の研究を第一とする四つの研究が、第六となっているこの研究において綜合的・集約的にすべて取り扱われていることから、自然にそう判断されたからである）

（3） Bazin: op. cit., p 80

（4） Ferdinand Brunot et Charles Bruneau: Précis de Grammaire historique de la langue française, Masson et Cie, 1949

（5） A. Haase: Syntaxe française du XVIIe siècle, Cinquième édition, Librairie Delagrave, 1965

（6） Ibid. p 376

（7） Ibid. p 377

（8） Pierre Richelet: Dictionnaire françois, Seconde Partie, Jean Herman Widerhold, Genève, 1680; p 371.

（9） augmenter の訳。Jean Dubois らは Dictionnaire du français classique (Librairie Larousse, 1971) において、augmenter の項でまず Exagérer の語を当て、「この意味は九四年のアカデミイの辞典では示されていない」とカッコ内で述べている。

（10） Antoine Furetière: Dictionnaire universel, Arnout & Reinier Leers, Haye et Rotterdam, 1690; Tome troisième, la page de SI, SIB.

（12） Le Dictionnaire de l'Académie Françoise, Jean Baptiste Coignard, 1694; Tome second, pp 474—475

（12） 一橋論叢　昭和五十年九月号　論説『詠嘆と分析』22ページ

（13） 作品中のページはすべて、Madame de Lafayette:

Romans et Nouvelles, Éditions Garnier Frères, 1961.
の版によるものとする。

(14) Dictionnaire universel; Tome troisième, TEL. TEM の欄

(15) 一橋論叢　昭和四十四年七月号　論説「『クレーヴの奥方』における「告白」の構造とその意味」48—49ページ

(16) Antoine Adam: Histoire de la littérature française au XVIIe siècle, IV, Éditions Domat, 1956; p 193.

(一橋大学講師)